

精神疾患、AIで診断

静岡大学と慶応大学は、うつ病や認知症などの精神疾患の症状を人工知能（AI）を使って自動診断するシステムの構築に乗り出した。実現すれば、精神科医の診断を経ずに疾患の兆候が分かり、未病の段階で治療できるようになる。精神疾患は精神科医との対話を通じて診断され、診断基準が曖昧な部分も多い。研究は新たな診断基準づくりにも寄与しそうだ。

共同研究するのは静岡大学情報学部の狩野芳伸准教授と、慶大医学部の岸本泰士郎専任講師によるチーム。2016年度から事前調査を始め、両大学の倫理委員会の許可が下りて、7月から研究に着

静岡大・慶大、システム構築へ

未病段階で処置

基準づくり期待

目的の単語が出ないなど精神疾患の兆候の例



集し、医師が診断した重症度などの結果とともにデータ化する。問診記録を静岡のグループがテキスト化し、自然言語処理して、自動で診察できるシステムを構築する。

言い回しが回りくどくなる、指示語が増える、

まず慶大病院とその連携病院が持つ問診記録を集める。30分から1時間の音声記録を数百人分収

集し、医師が診断した重症度などの結果とともにデータ化する。問診記録を静岡のグループがテキスト化し、自然言語処理して、自動で診察できるシステムを構築する。

狩野准教授は「精神疾患の症状がどうかを見極めるのは、医師でも曖昧な部分がある。単語レベルの解析だけでなく、文脈に応じた複雑な処理が必要」と話す。新システムは曖昧な精神病診断に一定の基準を見いだす期待もかかる。

AIによって精神疾患かどうかを診断するのは医師法に抵触する恐れもある。新システムは疾患の恐れがあると指摘するのにとめる計画だ。

狩野准教授はコンピュータの自然言語処理の研究を手掛け、会話の中でこそや駆け引きを通じて相手の正体を見破る

「人狼（じんろう）」ゲームの知見を取り入れて解決し返す。科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業（CREST）として助成を受け、予算は2年半で約1億円。18年度末に成果を報告する。